

各位さま

■ 第 45 回調査研究方法検討会かわら版 ■

去る 7 月 4 日（土）、5 日（日）：大阪国際会議場（大阪）にて第 45 回調査研究方法検討会が開催されました。今回、場所の設定・準備などは絹巻 宏先生のお世話になりました。また、鈴木英太郎先生のお世話により、山口大学医学部保健学科病態検査学教授 市原清志先生にもご出席いただきました。ありがとうございました。

4 日（土）

○「開業 18 年間に経験した細菌性腸炎の統計から」 絹巻 宏

細菌感染性腸炎は小児科外来で重要な疾患ですが、診療所からの臨床統計の報告は少ないようです。近年、カンピロバクター腸炎が増加しており、他の細菌も含めての報告です。1991 年 4 月から 2008 年 1 2 月の間に、絹巻小児科クリニックで経験された 744 例について報告されました。結果としてサルモネラ胃腸炎は減少傾向にあり、2003 年頃からカンピロバクター腸炎が増加していました。原因として検査技術の進歩や鶏肉や生肉の摂取も考えられます。全体の傾向を知るためにサーベイランス報告の胃腸炎を細菌性とその他（ウイルス性）に分ける必要性や、便培養の適応、具体的方法、診断前後での治療等について議論されました。

○「第 2 期麻疹風疹ワクチン接種によるブースター効果」 岡藤 輝夫

麻疹風疹（MR）ワクチン 2 回目接種による抗体価の変動についての調査報告です。岡藤小児科で 1 期、2 期の麻疹・風疹ワクチンを接種した 320 例について、麻疹中和抗体、風疹 HI 抗体を測定しました。結果では、麻疹においては、1 期接種後 5～6 年目に 2 期の接種を行っても有意な抗体価上昇は認めず、風疹でも一部上昇認めていますが有意とはいえない結果でした。ブースター効果がみられる時期の問題や、1 期と 2 期の接種間隔について議論されました。

○「MR ワクチン、第 2 期接種のブースター効果について」 鈴木英太郎

麻疹初回接種歴のある 81 名、風疹の初回接種歴のある 80 名について、その抗体価を測定し、6 歳時に 2 期の MR ワクチン接種を行った 15 例についてブースター効果を検討しました。岡藤先生と同様に、2 回目接種による明らかな抗体上昇は認められませんでした。

また、研究の過程において、後に他の研究や調査の必要性に気づくことがあります。当初、同意を得ていた目的以外に、後に追加して、その対象検体を他の研究のために使用する事の是非や、そのための倫理的プロセス等についても議論されました。

○「硬性鏡と産業用 CCD カメラによるローコスト鼓膜ビデオシステム」 鈴江 純史

小児科において中耳炎の診断は重要ですが、手技や機器の面において十分とはいえません。鈴江先生は、比較的 low コストの硬性鏡と産業用 CCD（Charge Coupled Device）カメラを用いた鼓膜ビデオシステムを導入され、その実際の利用方法や効果について報告されました。このシステムを導入されてから鼓膜の観察可能率が大幅に改善されています。また、本システムは耳鼻科で用いるファイバースコープと同等の高画質であり、一般のテレビビデオに録画可能です。VHS ビデオ以外にデジタルレコーダーへの記録も可能で検索・再生が容易です。今後さらなる応用が期待されます。

○「呼吸器感染症患児の鼓膜所見 - 6 ヶ月間の多施設共同調査 -」

小児科中耳炎調査グループ 土田 晋也

本研究は、開業小児科を受診した呼吸器感染症児における鼓膜所見、重症急性中耳炎の割合、その転帰を調査し、小児科でみられる中耳炎の特徴を明らかにする試みです。対象は、2009 年 1 月以降に小児科単科の診療所 10 施設を受診した呼吸器感染症患児とし、各施設 20 名を調査し

ました。マクロビューやカメラなどの検査機器を用いて鼓膜の詳細な観察を行いました。2006年日本小児耳鼻科学会誌報告の重症度分類の基準により診断を行い、治療は、2005年草刈らワーキンググループによる外来小児科への報告を用いました。急性中耳炎の定義の統一性、急性中耳炎と滲出性中耳炎の鑑別、対象のサンプリングの時期について議論されました。

○「父親の育児と家族に関するアンケート調査経過報告」

内田真依子

本研究は、第18回日本外来小児科学会年次集会のWS（第4回ミニ調査研究方法検討会）、また、第43回調査研究方法検討会で議論されました。養育期にある父母を対象に、家族機能の一つとしての育児力についての調査です。親の家族での対処能力は親の子供時代の環境に影響されるため、親の子供時代の育児環境もふくめ調査を行いました。日本外来小児科学会子どもネットを通じ全会員に調査票サンプルを郵送し協力を募り、171施設の協力を得ました。調査期間2009年3月～5月に協力施設へ調査票を郵送し、来院した患児の父親に調査票を配布し個別に郵送にて回収しました。回収率は38.6%（1159部）で有効回答率は98.5%でした。家庭や育児に関する大変興味ある調査であり、今後の解析結果が待たれます。

5日（日）

○「新型インフルエンザ発生の報道の後、診療所の来院患者はどう変化したか」

絹巻 宏

2009年4月23日にメキシコで新型インフルエンザ（新Flu）が発生し、国内では、5月16日に神戸市で初めて感染者が報告されました。大阪府内でも発生がみられ、5月17日から吹田市では発熱外来を始動し、園・学校は1週間の一斉休業となりました。このような異常事態の中での、保護者と患児の受診行動の調査を行いました。新Flu発生の報道前後での来院者数、年齢、症状、検査、処方内容を調査しました。絹巻小児科以外の近畿地区の他の診療所22施設についてもE-mailにて来院者数や新Flu発生数を調査しました。結果は来院者数は報道後2週目から通常診療の70～80%へ減少し、特に新Fluの市内発生があった地域での来院者数は60%になった診療所もありました。その原因として、新Fluの感染を恐れての受診控え、園・学校の一斉休業の影響があったと推測できます。

○「小児科における急性呼吸器感染症のLAMP法を用いた迅速病原診断」 吉田菜穂子

1999年頃よりマイコプラズマ肺炎の患者数は増加傾向にあり、マクロライド抗菌薬に対する耐性菌の増加の報告も増えています。小児の呼吸器感染症においてマイコプラズマ感染の有無を調査し、抗菌薬治療、耐性菌感染について検討を行います。マイコプラズマ感染の診断はPA法や簡易イムノクロマトグラフキット法より感度・特異性の高い遺伝子増幅法であるLAMP（Loop-Mediated Isothermal Amplification）法を用いて診断を行います。対象者の条件（発熱期間、呼吸器症状、症状の期間など）、マイコプラズマ感染の定義、検体の保存・郵送方法、同時に百日咳の調査をする場合の同意書、共同研究施設について議論されました。

○「マクロライド経口薬の小児におけるDrug complianceと服薬行動に対する影響」

片山 啓

経口マクロライド抗菌薬は苦味が強く、製剤の改善にも関わらず未だに服薬困難な訴えをしばしば経験します。実際にマクロライド経口薬を服薬できない児の実態調査を行う計画です。対象は一回の感染エピソードの中で、クラリスロマイシン又はアジスロマイシンを初めて処方する例、また、対照として非抗生剤（鎮咳剤や去痰剤など）のみを投与した例とします。方法は患児の保護者に対して文書にて本調査への協力をお願いし、はがき形式のアンケート用紙を配布します。今回、アンケート項目として飲ませ方、内容、服薬方法の説明の有無、また、ジェネリック薬、他のマクロライド薬、対象児の基礎疾患の影響、アンケートの郵送先などについて議論されました。

○「小児の体格に対する扁桃アデノイド肥大の影響」

片山 啓

小児の扁桃肥大・アデノイド肥大があり睡眠時無呼吸を認める例において成長ホルモンへの影響に関する報告があります (Bonuck KA et al. Arch Dis Child 2009;94: 83-91). 本研究は子どもたちの扁桃肥大, アデノイド肥大が成長や体格に与える影響の実態調査です. 方法は小学校・幼稚園児を対象に扁桃肥大を認めた児と肥大のない児について, 身長, 体重, BMI を比較検討します. また, 扁桃肥大のあった児については, 睡眠時無呼吸, 嚥下困難, 扁桃炎の反復なども調査予定です. 扁桃肥大の判断の統一, 判断する医師の専門性 (小児科または耳鼻科), 対象児の年齢による扁桃の変化, 睡眠時無呼吸の診断基準, アデノイド肥大の診断方法, 感染の影響を除く方法などについて議論されました.

○「乳児喘鳴と気管支喘息発症のリスク」

西村 龍夫

最近, 欧米において喘息やアレルギーの危険因子に関する報告が多くみられます. 今回, 本邦において喘息の危険因子調査を行う試みです. 対象は0歳または1歳から5歳以降まで経過を見た患児を対象とし, アンケート調査を行います. 調査項目は, 家族や対象児のアレルギー歴, 周産期情報, 家族の喫煙歴, 中耳炎の有無, 兄弟歴, 保育歴, 乳児期の喘鳴の有無, 抗生剤投与歴など多項目に渡ります. 前向き調査, 後向き調査など調査の方法や, 何歳まで調査行うか, 必要対象数について議論されました.

○「ムンプスおよび水痘に感染した保護者へのアンケート調査」

橋本 裕美

任意接種であるムンプスおよび水痘ワクチンを受けずに罹患した児の保護者の意識調査を行い, その結果をワクチン接種前の保護者への情報提供として役立てるための調査です. 先行研究として厚生労働省新興再興感染症事業 (平成15年金沢市, 平成17年堺市) の報告がありますが, 今回, 全国の小児科医療機関を対象としグループ研究を行う予定です. 対象児の病日による重症度の違い, 家族歴の有無, 医療機関によるワクチン啓発の違い, ムンプスや水痘の病態やリスクの説明などアンケートの回答に影響する問題点やアンケート項目として児が罹患した場合のデメリットの項目や本人や保護者が困った内容を記載する必要性などについて議論されました.

本検討会は日本外来小児科学会リサーチ委員会に属しています. 本検討会についてご相談がありましたら何なりと下記までFAXまたはメールでお問い合わせください.

連絡先: 〒833-0027 福岡県筑後市水田991-2 杉村こどもクリニック 杉村 徹

FAX: 0942-52-6777, E-mail: sugimura@kurume.ktarn.or.jp